
ドラゴンクエスト? ~紡がれし三つの刻(とき)~

乱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴンクエスト？～紡がれし三つの刻～

【Zコード】

Z2139Y

【作者名】

乱

【あらすじ】

この物語は、メインキャラクターなどを他の作品のキャラクターに置き換えてています。

主人公役の横島は転生者でも無く、世界移動した訳でも無く、横島というキャラクターを借りて来た訳です。他のキャラクター達も同様です。

キャラクターに合わせたギャグなどはし�ょっちゅうに入る事がありますが話は基本的に原作に沿って進みます。

ちなみにサブタイトルの「三つの刻」と言つのはパパス・主人公・勇者の三世代と主人公の幼年期・青年期前半・青年期後半を掛け合わせたつもりです。

それぞれ、一話づつ完成してからうやしょうとしてたけど少しづつでもなるべく毎日更新したいなと思ってこういう形にしました。本作はTINAMIにも投稿しています。

Level1 「帰郷・パパスとタタオ」 その1（前書き）

横島を主人公に置き換えたDQ?。

そしてビアンカやフローラなども他のキャラに置き換えてます。
パパスなど死んじゅうキャラなどはそのままだけど。

Level1 「帰郷・パパスとタダオ」その1

カツチコツチ、カツチコツチ、カツチコツチ、カツチコツチ、

カツチコツチ、カツチコツチ、カツチコツチ、カツチコツチ、

その広い部屋には時計の音と、その背中に紋章が刻まれた赤いマントを着けた男がうろついて歩き回る靴の音だけが響いていた。

「パパス王、お気持ちは分かりますが少し落ち着かれてお座りになつてはいかがですか？」

大臣であろう一人の男が歩き回っている男に語りかける。

「う、うむ。… そうだな」

パパス王と呼ばれた男はそう言つと玉座に座るが、しばらくすると立ち上がり再びうろついて歩き回り出す。

そうしていると階段の方から誰かが駆けて来る足音が聞こえて来た。

「パ、パパス様！！ お、お生まれになりました！！」

「何！？ 本当か、バークよ！？」

「はい！… 早く王妃様の所に」

「う、うむーー！」

そしてパパスはすぐさま階段を駆け上がりつて行く。

「で、パーク。それでお子は？パパス王のお子は？」
「お喜び下さい大臣様。それはもう立派な……」

パパス王が息を切らせながら出産が終った部屋へと駆け付けると侍女が笑顔で待つていた。

「パパス様、おめでとうござります！本当に可愛い、玉の様な男の子ですよ」
「そ、そつかーー！男の子かーー！」

ほぎやあ、ほぎやあ、ほぎやあ、ほぎやあ、

生まれたばかりの赤ん坊は元気に泣いていて、母親はそんな我が子を愛おしそうに見つめている。

其処に満面の笑みを浮かべたパパスが歩いて来た。

「良く頑張ってくれたな、マーサよ」

「あなた…」

「おお、こんなに元気に泣いて……、

早速だが、この子に名前を付けてやらないことな

「ええ、そうね」

パパスは顎に手をやつり、餘りながい名前を考へてこる。

「う～む、う～～む……、そうだ…… 良い名が浮かんだぞ。トン
ヌラ、トンヌラヒトヒツのせどりだーー？」

「…………トンヌラ…」

「どうだ、良い名だろ？。ははははははははーーー！」

「まあ、ステキな名前！ こましきて、かしこうど……、でも私
もこの子の名前を考えていたの。タダオとヒツのせどりかじり。」
「へ、そうか……、あまりパツとしない名前だがお前が良いのなら
良いこと思つた」

そしてパパスは我が子を抱き抱えるとその名を呼んだ。

「神から授かった我等の子よ、今田からお前の名はタダオだーー！」

「元気に育つてね、タダオ」

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、

タダオと名付けられた赤ん坊は一人の腕の中で元気に歓声を上げて
いた。

やつて……

ザザーン、ザザーン、

波に満ちた船の中の一隅で少年は囁き聲を覺めた。

「えへ、むにゅむにゅ。めりめりおまよ

「おお、起きたかタダオよ。……どうした？変な顔をして」「何や変な夢を見たんや。ワイがどつかのお城で生まれる夢なんや」「はつはつは、それはまた変な夢だな」

「やんでな、変なおっさんのがワイにトンヌウツアーティーとさでもな二知前をせかようとするんや。……つい、どうしたかめりめりおまよ

「へ、変なおっさん……、とさでもな二知前……」「オーッ

パパスは四つん這いになつて何やら頃垂れていた。

「と、とつあえずこの船旅ももうじき終りだ。今之内に世話をになつた人達に挨拶をして来なさい」

「分かつた。ほな、行つて来るわ」

そう言つとタダオは元氣に部屋を飛び出して行つた。

そんな後ろ姿を見ながら…

「マーサよ、タダオもあんなに大きくなつたぞ。早くお前にも会わせてやりたいな。……しかしタダオの奴、あの話し方がすっかり定着してしまつたな。何が気に入つたんだか……」

旅の途中、しばらく滞在した村の独特の話し方だがタダオもようやく喋り出した所と言つ事もあって、あの話し方で言葉を覚えてしまつたのだった。

その格好は白い布の服の上に紫色のマント、頭には赤い布を覆い被せる様に巻いている。

Level1 「帰郷・パパスとタダオ」その1（後書き）

（・・・）やはり子供時代の横島は関西弁の方が似合っているので無理やりだけど設定をねじ込みました。

ちなみにタダオが頭に巻いている赤い布は？の主人公を思い浮かべてくれると解りやすいです。

子供の頃はバンダナよりそういう感じがいいと思ったもので。

Level1 「帰郷・パパスとタダオ」その2

「お早う、船長さん」

「おや、タダオくんじゃないか。お早う」

タダオが甲板に出ると船長は船縁から双眼鏡を使って海を監視していた。

「もうじきビスターの港に着く。もうしたらパパスさんやタダオくんともお別れだな、寂しくなるよ」

「そうやな、せっかく船のみんなとも仲良くなれたのに残念や」

寂しそうに俯くタダオの頭を船長は優しく撫でてやる。

「はつははは、人の縁と言つ物はさう容易く切れる物じゃない。何時かまた会えるさ」

「ん～、むつかしゅうつてよく分からんけどまた会えるんならその時が楽しみや」

「そうだな、大きく立派になつたタダオくんと再会できるのを楽しみにしてるよ。……ほら、ビスターの港が見えてきた。お父さんを呼んで来なさい」

「うん、分かった」

笑顔で頷くとタダオはパパスを呼ぶ為に駆けて行く。

「…………、大きくなつたタダオくんか。きっとその時にはタダオ様と呼ばなくてはならないんだろうな。ねえ、デュムパボス・エル・

ケル・グランバー「ア国王様」

そつと呟いたその言葉はタダオの耳には届く事無く波の音にかき消された。

「父ちゃん、港が見えて来たで」
「ようやく着いたか、村に帰るのも2年ぶりだな。タダオはまだ小さかったから良く覚えていないだろ」「何となく覚えとるで」
「どうか、ならば早く帰ろう。バークが待ってるぞ」
「うん！」

桟橋の所に着くと船長達が誰かを出迎えをしている様だ。

「船長、誰か乗り込んでくるのか？」
「ああ、パパスさん。この船の持ち主のフォーベシイ様ですよ」「どうか。ならば乗せてもらつたお礼と挨拶をしなければならんな」
そして長い黒髪を靡かせながら一人の男が乗り込んで来た。

「フォーベシイ様、お待ちしておりました」

「ああ、出迎え御苦労をま船長。おや、その人達は？」

私の古い知り合いで、船の護衛代わりに同船していただいた……

いや、船を護つていただけなんならお互い様ですよ。有り難う

10 → 11

そんな風に一人が握手をしていると紫色の長い髪の小さな女の子が船に乗り込もうとしていた。

卷之三

「おや、ネリネちゃんにはこの入口は高すぎたかな？」

ネリネと呼ばれた女の子が桟橋から船に乗り込もうと四苦八苦していると。

「え？」
「ほれ」

タダオはそんな女の子に手を差し伸べてやる。

「つかまつや」

あははい／／／

女の子は赤くなりながらもその手を掴み、無事に船に乗り込んだ。

「タダ才の奴め……」

「ははは、ネリネちゃん。ちゃんとお礼を言つんだよ
「は、はい。あ、ありがと…」「やります／＼／＼」

そんな時、もう一人の女の子が乗り込んで来た。

「ちよつとネリネ、それに其処の貪相な奴。さうかとビュッケ、お
じさんも邪魔なワケ」

黒髪で色黒の女の子はそう言いながらズカズカと歩いて行くと部屋
があるであろう廊の中に入つて行く。

「これヒミ、失礼じゃないか。すみません、礼儀のなつてない娘で」
「いや、お氣になさらずに。さあタダオ、我等も行くとしよつ
「分かつたで父ちゃん、行こか……ん?」

タダオはパパスの後を追つて船を降りようとしたらネリネはタダオ
の手を掴んだまま離そとしなかつた。

「どうしたんや?」

「あ、あの……、お、おなまえ……。わたし、ネリネ／＼／＼

ネリネはたゞたゞしくも、タダオに名前を聞く。

「そうか、自己紹介がまだやつたな。ワイの名前はタダオや、よう
しくなネリネちゃん」

「う、うん……。またね、タダオ…… もま…／＼／＼

そこまで言つとネリネは顔を真つ赤に染めて逃げる様に走り去つた。

「?/?/?父ちゃん、ネリネちゃんビュッケしたんや?」

「パパスさん……、貴方のお子様は……」

「言わないで下をこ……。（これで何本田の旗だ？）」

やはり此処でも彼は鈍感であつた。

「では世話をになつたな、船長。旅の無事を祈つてるぞ」

「ええ、パパスさん……、さんこそお元氣で。タダオくん、元氣でな。お父さんの様に立派で強い男になるんだぞ」

「うん、船長さんも元氣でな。バイバイや」

そして、桟橋と船を繋いでいた橋は下ろされ、船はゆっくりと離れて行く。

タダオが名残惜しそうに船を見送つているとその後ろ側にあるベンダの様な所からネリネが顔を出し、手を振つていた。

少し寂しそうな顔をしながら……。

「またなーー、ネリネちゃん～ん」

タダオもそんなネリネの姿が見えなくなるまで手を振り続けていた。

Level11「帰郷・パパスとタダオ」その2（後書き）

ネリネとタダオの話をもつと書き足すべきだったかな？一応、ネリネの「田ぼれなんだけど…」まあ、ゲーム本編でもんな感じだったし。

でも、もう少し考えてみるかな？

（・・・）ちなみにアンディ役にはピートを用意しています（笑）。つまり、三人目の嫁候補は別の人でした。

Level1 「帰郷・パパスとタタオ」その3（前書き）

とつあえず、今回で一話目が完成。……はつくしょん！

風邪をひきました。

「さて、行くとするか。今からなら夕暮れ時にはサンタローズに帰れるだろ?」

「うん、はよ行こ。父ちゃん」

ビスター港から飛び出したタダオはサンタローズへと続く道を元気に駆けだした。

『ピキ——ツ——』

「わっ!」

サンタローズへと続く街道を駆けているタダオに、草むらの中から魔物が道を塞ぐかのように飛び出してきた。

「な、何や、スライムか」

タダオの田の前には三匹のスライムが並んでいて、その内の一匹がタダオを睨みつけたかと思うと行き成り飛びかかって来る。

「なんのっ!」

各地を旅して来たタダオは今までモンスターとの戦闘経験があり、スライム辺りが相手ならそれほど恐れる相手では無かつた。

タダオは背中にショットていたひのきの棒を掴むと一気にスライムに向けて振り下ろした。

『ペギヤーーッ！』

タダオの一撃を受けたスライムは地面に落ちると弾け飛び、その場所には赤い宝石が残されていた。

魔王の邪悪な波動を受けたモンスター達はその影響を受けて魔力を結晶化させた宝石をその身に宿している。

倒されて命がぬきても宝石は消える事無くその場に残り、その宝石の価値はモンスターの強さに比例して強力なモンスターであればあるほどその純度を増し、より高額で取引される。

「うーーん、2Gついでにやな
『ペギヤーーッ！』

宝石を日の光に翳しながら鑑定していると他のスライムを退治したパパスがやつて来てタダオの頭を撫でる。

「中々見事な一撃だつたな、これは将来が楽しみだ
「へへへ、そやろ？ほい、父ちゃん」

少し照れながらもタダオは手に入れた宝石をパパスに渡そうとするが彼はそれに手をかざして止めた。

「それはお前がスライムを倒して手に入れた物だ。お前が持つていなさい」

「ええんか？」

「ああ、無駄遣いはするんじゃないぞ。それに……」

「それに？」

パパスは厳しさと優しさの入り混じった目でタダオを見つめ、頭を撫でながら言葉を続ける。

「その宝石はお前が奪つた命である事は忘れてはならん。たとえ相手がモンスターであろうともだ」

「……うん、モンスターだって生きてるんやもんな

「分かつていればいいんだ」

宝石を袋にしまい込み、タダオとパパスは再び歩き出す。それからも何度も何度かモンスターの襲撃を受けるが左程大した相手でも無く、タダオも少し怪我をしたりしたがパパスのホイミによつて瞬く間に治療される。

『ピキ——ツ——』

そして何度も闘いの時、タダオは襲い掛かつて来たスライムをひのきの棒で撃退する。

『ピキヤツ——』

その攻撃は「会心の一撃」と言つべき威力だったが、不思議な事にスライムは何時もの様に弾け飛ぶ事無く、地面に転がり田を回していた。

「ピキヤ～～～ア……」

「あれ？ 父ちゃん、なんでコイツは宝石にならんのや？」

「こ、これは……、まさか」

タダオは不思議がり、パパスが呆然としているとスライムは徐に起き上がり、タダオを潤んだ目で見上げている。

「ピイ、ピイ」

「何やコイツ、何が言いたいんか？」

「……きつと、友達になりたいんだろう」

「ともだち？ ワイはコイツをたおそうとしたんやで？」

「きつとタダオに倒された事で悪い心が無くなつたんだろう」

そう言つて来るパパスからスライムに目を移すとタダオは笑いながら話しかける。

「じゃあ、ワイといつしょに来るか？」

「ピイーーー、ピッピィーーー」

スライムはそう誘つてくれたタダオに飛び付くと、喜びながら頭の

上に盛り甘える様に体を揺らしている。

「（やはりマーサの子供だな。タダオにも同じ力が宿っていたか）
じゃあ名前を付けてやらねばな。トンヌ…」

「ピエールや…！　お前の名前はピエールやで。……父ちゃん、な
にか言ったか？」

「いや……、何でもない…」

パパスはそう言いながら歩き出しがその背中には何処となく哀愁
が漂っていた。

そんなパパスを見つめるピエールは安堵の表情をしていたとか。

そして空が茜色に染まり始めた夕暮れ時、二人と一緒に遂にサンタ
ローズへと辿り着いたのだった。

＝冒険の書に記録します＝

《次回予告》

旅を終えてサンタローズに帰つて来たワイと父ぢやん。
そこで昔、よく遊んでもらつてたレイコ姉ぢやんと再会した。
でも、レイコ姉ぢやんの父ぢやんは病氣みたいなんや。
レイコ姉ぢやんの父ぢやんの薬を作る為に薬師のおひぢやんを捜し
て洞窟を探検や。

次回「eve12「洞窟の中には」

わあ、ドリクHするで…

Level11 「帰郷・パパスとタダオ」その3（後書き）

と、言う訳でスタートした多重クロスキャラによるドラクエ？ストーリー。

何故、タダオが主人公なのにパパス役がタイジュじゃないのか？それは物語の上でどうしてもパパスの死が免れない為です。

最初はギャグメインで行こうと思つてそれも有りかなと思つてたんですけどプロットを立て行くと結構シリアルな話になつて行つて、やはり死ぬ役に他のキャラクターを持つて来るのは不謹慎かなと言う事で原作通りに父親はパパスのままで行こうとした次第です。

仲間一号のスライムが「スラリン」じゃなく「ピール」なのはスライムからナイトへの進化フラグだつたりする。

敵モンスターの時は『』ですが、味方モンスターになつてからは「」と括弧を変えています。

ピールの声は「メちゃん風と思つていただければ丁度いいかと。

そしてパパスさんは未だに諦め切れてない様です。

倒されたモンスターがGではなく宝石を落とすのはアニメドラクエの「アベル伝説」から持つて来た設定です。

ちなみに次回予告で解る様にイメージ曲は「夢を信じて」です。

絵が描ければイメージ画を描くんだけどな。

誰かいなかな～。

一・）チラリ

「取扱説明書」（前書き）

少しでも解りやすくなればと書いてみました。

「取扱説明書」

まずは、この物語の世界観から。

- ・原作にない村や町などが出でたりしますが基本的に何の世界。?の町や国が出て来る事は無い。

・主人公はタダオ。（GS美神・横島忠夫）本名タダリューオム・エル・ケル・グランバニア

ビアンカ役はレイコ（GS美神・美神令子）

フローラ役はネリネ（SHUFFLE！・ネリネ）

デボラ役はエミ（GS美神・小笠原エミ）

アンディ役はピート（GS美神・ピート）（オチは分かりますね）

サンチヨ役はバーク（Tick! Tick!・バーク）

その他、色々な作品からもキャラクターが出て来ますがそれが誰かは物語が進んだ先で。

・基本、話は元ゲーのドラクエ?に沿つて進みますが当然原作に無い展開もあります。

（タダオが無自覚の内にあちらこちらで旗を立てまくつているなど）

・パパス、マーサ、ダンカンなど、キャラクターを入れ替えていいキャラなども多数出て来ます。

パパス役を大樹にしようかとも思いましたが、ストーリー上どうしても死亡フラグは消せないのであえてパパスのままで。

モンスターを倒した時に得られるGについて。
↑ゴールド

・最初は倒したモンスターを素材として売り払いGを得るという事

にしようかと思いましたがそれは既にやつて居るのでボツ。

・モンスターが冒険者や旅人を襲つた際に習性で光り物（G）を盗つていい、それを倒した際に再度手に入れるという方法もありますが、これも既にやつて居ると言つてこれもボツ。

・そこで思い出したのがアニメ版ドラクエ「アベル伝説」の宝石モンスター。

・魔王の魔力によつて凶暴化したモンスターの内部で魔力が結晶化、宝石になる。

その宝石がモンスターを倒した際にG^{ゴールド}の代わりの報酬になる。

・つまり、タダオが仲間に出来るのは体内で魔王の魔力が結晶化していないモンスターと言つ事。

・タダオが倒す事によつてモンスターの体内の魔力は浄化されて結晶化、それが仲間になるモンスター。

・モンスターはドラクエ？には出て来ないモンスターや原作では仲間に出来ないけどこの話では仲間に出来るモンスターなどが出てきたりします。

その他の設定はまた後ほど。

「サンタローズ」

船旅を終え、街道を歩くパパスとタダオ、そしてタダオの肩に乗っているピエール。

そんな二人と一緒に目的地であるサンタローズの村が見えて来た。

「やつと帰つて来たんやな父ちゃん！」

「そうだな、タダオ」

村の入り口には見張りの村人が立つていて、一人を見つけると警戒するがそれがパパスだと気付くと満面の笑みで二人を迎える。

「パパスさん、パパスさんじやないですか！帰つて来たんですね！」

「おお、エーじゃないか、長い間留守にしたな。これから暫くはこの村に腰を落ち着けるつもりだ」

「それは皆が喜びますよ。……それはそうと、その子の肩に乗つてるのは…スライム！？」

門番のエーはタダオの肩の上のピエールを見るや否や、槍を向けようとするがパパスは笑みを浮かべながらそれを手で制す。

「心配は要らぬぞ。このスライムは邪氣を祓われている、もはや悪さはない」

「セツヤで、ペールはワイのともだちやーーー。」

「アーティスト」

「君は… タダオくんか。大きくなつたな、パパスさんやタダオくんが大丈夫と言うのなら心配はいらないな。じゃあパパスさんが帰つて来た事を皆に報告しなきや」

そう言つとエーは村へと駆け出し、喜び勇んで村中にパバスが帰つて来た事を叫んで回つた。

「おお―――いつ―――！」
パパスさん達が帰つて來たぞお―――つ
――」

「お帰り、パパさん」

「やあ、良くなつて来たな！今夜は一杯飲みながら旅の話を聞かせてくれ」

村人達は皆笑顔で一人を迎へ、家が見えて来ると玄関の前に召使いのバークが待つていた。

彼の服装は他の村人達とは違い黒を基調とした、いわゆる執事服である。

バークはタダオ達を見つけると勢いよく走りだした。

「坊っちゃん…………う……」坊っちゃん、坊っちゃんではないですか……。」

「た、ただいまや、バーク」

バークはタダオに駆け寄ると抱き抱え頬擦りをする。

一見するとかなり危ない光景ではあるが彼のパパスへの忠誠心は偽りなく、彼から寄せられる信頼度も高い為パパスもそれを笑いながら眺めている。

もしこれが、他の男であつたならすぐさま切り捨てられていたらう。

「はははは、大きくなられましたな」
「うん。ワイ、大きくなつたやろ」
「留守の間、苦労だつたな、バーク」
「パパス様、このバーク、タダオ様とパパス様のお帰りを一日千秋の想いでお待ちしていました」
「うむ、心配をかけて悪かつたな」
「さあ、家中へ」

そしてパパスとタダオは懐かしの我が家へと入つて行つた。

「お久しぶりです、パパスおじ様」

そう言いながら一階から降りて来たのは栗色の髪を両側で結んだタダオよりも少し年上の女の子だった。

「おや、君は？」

「私の娘だよ」

「マミア、久しぶりだな。するとこの子はダンカンの娘のレイコか」「ああ、タダオも大きくなつたね。一年ぶりだから当たり前といえば当たり前だけどね」

「タダオ、私の事覚えてる？」

「えへへと。……あつ、レイコや！！」

「…2才年以上のお姉さんを呼び捨てにするのは珍しいの？」

そつ言いながらレイコはタダオの口を掴み、思いつきり両側に引っ張る。

「いひやい、いひやい、ほめんなはい、れひほおねへひゃん！！」

「解ればいいのよ」

「「「ははははは」」

大人達はそんな子供達を微笑ましそうに笑っていた。

「ねえ、タダオ。おじ様達は大人の話があるだろうから私達は一人で遊ばない？」

「うん、遊ぼ」

レイコとタダオはそう言いながら一階へと上がつて行つた。

「それでマミアよ、何の用事なのだ？私達が帰つて来る事を知つて

いた訳ではあるまいに」

「ああ、ウチのダンナが病気になつてね、薬を調合してもういに来たんだけど肝心の薬師のビーが洞窟に材料の薬草を取りに行つたまま戻つて来ないんだよ」

「う～～む、そうか。私もあの洞窟には用事がある。ついでと見ては不謹慎かもしれないが探してみよう」

「頼んだよパパスさん」

Lesson 2 「洞窟の中では」その1（後書き）

（・・・）ルドマン役がフォーベシイなのにサンチョ役がバークなのは、ちょっと違和感。しかし、闘う召使い（執事）を誰にするかと悩んでいるとあの雄叫びが脳の中を駆け巡ったのです。『坊つちやーーーつーーー』と。

「ところでタダオ、そのスライムはどうしたの？」

「帰つてくる途中で友だちになつたんや、名前はピートール。ピートー

「アーティスト」

「魔物と友だちになるなんて、アンタはホントふしきな子ね。まあいいわ、私はレイコ、よろしくね。ピエール」

二二二

笑いながらピエールの頭を撫でてやるとピエールは嬉しそうに鳴きながらレイコの手に頭を擦りつける。

「あいさつは終りやな。じゃあ、何して遊ぶ？レイコお姉ちゃん」「そうね、なら本を読んであげるわ。この本なんか良さそうね」

レイコは本棚から一冊取り出しへペラペラとめぐるとそのまま本棚に戻し絵本を取り出す。

「やつぱりタダオには絵本の方がいいわよね
「読めへんのなら素直にそう言えば……」パコーンンン
「良く聞こえなかつたけど何か言つたかしりへ
「……何も言つてしません……」

タダオは涙を滲ませ、叩かれた頭を擦りながらレイコと絵本を読んでいく。

ペールは何やら怯えてる様だ。

『ヤマグチ＝セマシ冒険隊』

冒険家、ヤマグチ＝セマシが世界中の洞窟や未開の地を冒険して回るところの話の絵本である。

レイコが机の上に絵本を広げて読み、タダオとペールはその横から覗き込んでいた。

「『まつくりやみだ、これはなにがおこるかわからないぞ』ヤマグチ＝セマシはいま、だれもはいつたことのないじつひこまここうつとしている」

「なあ、レイコお姉ちゃん」

「どうしたのよタダオ？」

「この絵なんやけど、誰も入った事の無い洞窟やのに向で入つて来るカワグチを洞窟の“内側”から描こうやんや？」

「……さあ……、続きを読むわよ。どうくつこまこいつたカワグチのあしもとにほひとのあたまのほねが……」

「えらいピカピカできれいな骨や……」スパークーーーン――！――

レイコの「ひづき。

タダオに25のダメージ。

ペールは逃げ出した。

「……黙つて聞いてるひで事が出来ないの？」

「……カドは反則や……」

「ピキイ~~~~~」

「レイ」「ーー、やうそり宿に帰りますよ」

「はーい、ママ。じやあタダオ、またね」

「うん、レイ」「お姉ちゃん」

レイ」「達は宿へと戻り、タダオは一階へと下りて行く。

「さあ、坊っちゃん。今日はこのバークが腕によりをかけて御馳走を作りますからね」

「わーい、楽しみやーーー！」

その日の夕食は思った以上に豪勢で、タダオは久しぶりに腹一杯の食事に満足したようすですぐに眠りこんでしまった。

「ふああ~~~~~、おはよーわ」

翌日

「お早ハビリをります、坊つちやん。朝食の用意は出来ますよ」

「ああ、早く顔と手を洗つて来なセー」

「はーーい」

タダオがまだ食べている時、こち早く食事を済ませたパパスは立ち上がるとタダオに話しかける。

「タダオよ、私はこれから用事があるので出かけるが決して一人で村の外へは出ではいかんぞ」

「わかつたで、いつてらつしゃいや父ちゃん」

「ペッ、ペイーー」

昔の事を思い出し、暗い表情になつていたバークだが元気に駆け出すタダオを穏やかな顔で見送る。

「氣を付けて下さいね、危ない事はなさらない様に」
「わかつとるつて!」

Level 2 「洞窟の中に」その2（後書き）

（・・・）川口浩探検隊。幼い頃彼等は私のヒーローでした。本氣で信じていた純粋なあの頃にはもう戻れない。

村の中を歩くタダオだが、もう春も間近だといつも肌寒さに震えていた。

「うー、寒い寒い。どうしたってこうんだろ? うね今年は?」

「雪も寒そつやな。早う春が来ればええのにな」

そして、宿屋に着くとタダオは一階に上がりレイコ達が泊っている部屋へと入つて行く。

「アーニ姫が、おまえがアーニ姫だよ！」

「おや、坊やはパパさん所のタダオ君だね」

「うん、レイ【姉ちゃんは?】

「折角遊びに来てくれて悪いんだけどね、レイコはまだ寝てるんだ

そういうながらベットで寝ているレイコを覗き込むが、マリヤは寝ているレイコの髪を優しく搔き分けながらタダオに呟つ。

「この子は病気の父親が心配でね、昨夜も中々寝付けなかつたみたいなんだよ」

「そつかー。『メンな、わるこ』と呟つてもひつたわ」

「ははは、いいんだよ。だからもつしコレイドを寝かしてやつてね」

「うふ。じゃあ、また後でな」

そう言ひながら部屋を出て、扉を閉めみつといつもアマヤの姿がタダオの耳に聞こえて来た。

「はあ～、パバスさんも同じだしね。誰か捜しに行つてくれたうねえ」

宿屋を出で、少し歩いた所でタダオは足を止める。ホールは不思議そうにタダオを見上げる。

「ペイ？」

「よつしゃーペール、ワイヤで薬師のおつやんをさがして行へんや。そつすればレコ姉ちやんをせおひやんもよろいふで」

「ペー、ペー、ペー」

そして、こや洞窟に乗り込むとするのだが流石に武器がひのきの棒では心許無い。

そこで武器屋で新しい武器を買おうとしたら店の親父は。

「ほへ、ビーの奴を捜しに行くのか。だつたら特別サービスだ、今あるGにひのきの棒を買い取つた分を足して銅の剣を売つてやる。それでもGは足りないんだけどな、坊やの勇気に免じてだからな。他の雖には内緒だぞ」

と、銅の剣を売つてくれた。

「あらがと、おっちゃん。がんばつてくれるでー。」

タダオはさすがに買つたばかりの銅の剣を腰布に挿し、喜び勇んで駆けて行つた。

「ははは、冒険ゴッコか。俺も小さい頃はよくやつたものだ」

何と言つ事でしょ。この男はタダオが本当に洞窟に入るとは思つてなかつた様です。

（サンタローズの洞窟）

洞窟に入ると流石に薄暗くなつて来て、ピエールが一緒にとは言え不安に駆られて来る様だ。

なのでタダオは歌を歌いながら先に進む事にした。

歌うのはあの絵本が題材になつた歌で、あのツツコミ所満載の絵本は小さな子供には結構人気があり、そのツツコミ所をツツコミまくつたこの歌は子供達の間で流行つていた。

ガイドラインの問題で掲載できないのが残念だ。

「～～そそりぱちの次はどくいも……」

歌を歌つてゐるタダオの前の方から何やら物音が聞こえて来た。そして、暗闇の中から出て来たのはスライムとおおきづちの一匹だった。

「ピエール、あいては同じスライムやけどたたかえるか？」
「ピィツ！ピッピィーーー！」

ピエールは任せろと言つ様に身構えている。

おおきづちは初めて見るモンスターだが、パパスからその特徴などは聞いているので驚く様な事は無かつた。

だが、ピエールとは違つその赤く濁つた瞳を見ると何処となく寂し

くなるタダオであった。

Lesson 2 「洞窟の中に」 その3 (後書き)

(・・・) タダオが歌っているあの歌、小説版から持つて来たネタでしゅ。

「本當ならともだちになれるかも知れんのやけど、かかるて来るならワイもてかげんでけへんで」

『アーティストギャラリー』

スライムはピエールに襲い掛かるがピエールはそのまま壁にぶち
し、逆に体当たりをかける。
ピエールの体当たりをまともに受けたスライムは当たり弾け飛んだ。

「フガ——！」

「ほんのお——つ——！」

タダオの頭ほどの大きさの木づちを振り上げながら突進してくるおきづちにタダオは慌てる事無く振り下ろして来る木づちをかわし、銅の剣を振り抜いた。

『フギヤ――――!』

おおきびゅせ悲鳴を上げながら真っ一つになり、地面に落ちると溶ける様に消えて行き、後に残ったのは宝石だけだった。

その宝石を拾い上げるタダオの所にピールがスライムの宝石を咥えてやって来た。

「いぶるひさんや、やピール」

「ピール」

ピールから宝石を受け取るとタダオはピールの頭を優しく撫でてやると、それが気持ちいいのか体を揺らしながら喜んでいる。

そしてタダオは手の中にある宝石を見つめると寂しそうに呟いた。

「ワイヤがっぽつた命か……」

「ピイ？」

「なんでもないんや」

宝石を袋の中にしまい込むとタダオは再び歩き出した。

そして次々と襲い掛かってくるモンスター達。

蝙蝠の様な姿をした「ドライ」、丸い体に何本ものとげを生やした「とげぼうず」、大きめの体で頭に鋭い角を生やした「いつかくウサギ」、突然足元の地面から攻撃して来る「せみもぐり」。

此処まで襲つて来たモンスターと共に通るのはその瞳が赤く濁つて
いる事、思い返せばピエールが襲つて来た時は皿つきは鋭かつたも
の、瞳は濁つて無かつたよつて思い出すタダオだった。

奥へと進み、地下に続く階段を下りると岩が崩れている所が見えた。
近づいてみて見ると更に下の階に岩が落ちていてる様だ。

「あぶないなー。ワイらも気をつけんといかんな、ピエール」
「ピエ、ピエ」

更に奥へと進み、何度目かの戦闘の際にピエールが傷を受けてしま
つた。

「だ、だいじょうぶか、ピエール？」
「ピ...ピイ〜〜

ピエールはタダオに心配をかけまいと平気そうな振りをするが、そ
れがやせ我慢だと言つ事は誰が見ても分かる事であった。

「こんな時、父ちゃんやつたら“ホイミ”でピエールを治せるのこ
……、あれ？」

タダオが“ホイミ”と口にした際、手から何か温かな力を感じ、自分の体の傷が癒えている事に気付いた。

それはパバスにホイミをかけてもらつた時と同じ暖かさだった。

「…ひょつとして……、 “ホイミ”」

「ピ?…ピイ〜〜〜」

ピエールに手をかざしてホイミと唱えると、タダオの手から光が零れてその光はピエールの体の傷を癒して行く。

「ホ、ホイミやー・ピエール、 ワイにもホイミが出来たでー！」
「ピイー、ピイーーー」

カサリ

そうやつて喜んでいると、後ろの方から物音が聞こえて来た。
神経が過敏になっているタダオはすぐに振り返り、銅の剣を構えながら叫んだ。

「モ、モンスターか！？ かかつて来るならかかつて来んかーいつ

！！」

「ピキーイツー！」

振り向いた先には一匹のスライムが居り、怯えながら叫んで来た。

「まつ、待つてよー。虧めないでよ、僕は悪いスライムじゃないよー」

「ス、スライムがしゃべった？」

スライムが喋つた事に驚くタダオだが、すぐに構えていた銅の剣を下ろすと鞘の中へと戻した。

スライムはその行動に驚きながらも少しづつタダオへと近づいて行く。

「僕の事、悪いスライムじゃないって信じてくれるの？」

「ねー、お前の皿はホールみたいにキレイやからな。悪いモンスターなりもつてこやな色をしてるで」

「ノービル」

タダオがスライムの問い合わせに答えると、ピエールもまた「その通り」と言わんばかりに頷いている。

「へえ～～、君の名前はピールって書つか」

「ピィ、ピィピィ。ピィ～～？」

「うん、とてもいい名前だね。僕？僕の名前はね…」

「お前、ピエールと話せるんか？」

「そりや、僕もピエールも同じスライムだもん」

「あ、そういうやうやつたな。わはははは」

「ピィ～～…」

照れくさそうに頭を搔きながら笑うタダオをピエールは呆れた様に見つめ、スライムはそんな一人を不思議そうに眺めながら語りかける。

「君は人間なのに何でモンスターのピエールと仲良くしてるので？ピエールって名前も君が付けてくれたってピエールが言ってるし」

「何でって、ともだちと仲よしするのは当たり前やろ？」

「友だち……」

自分と同じスライムを当たり前の様に友だちと言つタダオをスライムは少し恥しそうに見つめる。

「ピィ、ピィピィ」

「そうだね、忘れていた。僕の名前はスラリン、よろしくねピエール。そして…」

スラリンは自己紹介をすると少し不安そうにタダオに目を向ける、すると。

「ワイか？ワイの名前はタダオや。仲よしそうな、スラリン」

「ピィツ、ピィ～～」

「あ……う、うんっ！」

暗い洞窟の中で一人ぼっちだったスラリン、人見知りで寂しがり屋だった彼に初めて友だちと言う光が射した瞬間だった。

～スラリンが仲間になつた～

Levele 2 「洞窟の中に」 その4 (後書き)

（・・・）と、言ひ説で洞窟の中に居たあのスライムがスラリんとして仲間になりました。

Level 2 「洞窟の中は」 その5 (前書き)

——話題は今回で完成です。

洞窟の中ではスラリングが先頭になつて道を案内している。流石に洞窟の中を住処にしていただけはあつて魔物の少ない所を選んで進んでいる。

「ところでタダオ」

「ん、何やスラリン?」

「タダオはどうやってピエールを仲間にしたか覚えてる?」

「ん~、どうやつたかな? いつもはたおした後はじけ飛んでたんやけど、ピエールはすぐに起きあがつて来たんや。父ちゃんに聞いたらともだちになりたがつてゐつて言つからともだちになつたんや。な、ピエール」

「ピイ、ピイ」

「そうか、だつたらピエールは“染まりきつてなかつた”んだね」

「…そまりきる?」

「うん。襲つて来る魔物を倒した後、宝石が残るだろ?」

「……ああ…」

タダオはそう答えながら袋の中から宝石を取り出す。

「それは僕達の体の中にある魔力が魔王の悪い波動で魂」と結晶になつたものなんだ。魔王の波動に“染まりきつてしまえば”もう元のふつうの魔物には戻れないんだ。ピエールはまだ“染まりきる”前だつたから元の魔物に戻る事が出来たんだよ

「」

(それでも本当なら) こんなに仲良くなれる筈はないんだけど)

そんな風に話をしながら進んでいると、地下に続く階段がありタダ
才達は地下に降りると何処からかつめき声が聞こえて来たのでタダ
才達はすぐに駆け寄つて行く。

其処に居たのは一人の男で上の階から落ちて来たであるが若に足を
挟まれていた。

二二二

ପାତା ୧୦୦

れあこへ

近づいて来たピエールに慌てふためく薬師だが、続いて聞こえて来たタダオの声に幾分落ち着いた様だ。

「！」、子供？ 何で子供がこんな所に？
「おっちゃんは薬師のおっちゃんか？」
「あ、ああ、そうだが」
「よかつた、さがしてたんやで。レイ」「姉ちゃんの母ちゃんが薬が
来るのをまつとるんや、はやく帰れ！」
「そ、そつか。なにこの顔をどかしてられないか、身動きが取れな
いんだ」

「わかつたで、ピールとスラリン手伝ひてや
「ピイツ」

「分かつたよ、タダオ」

タダオとピール達は岩を力一杯に押して行くと、岩はよつよつと動き出し薬師のジーはよつよく解放された。

「そりか、君はパパスさんの息子のタダオくんか。しかしその魔物達は一体……」

「ピールとスラリンはワイのともだちや。悪い魔物やないで」

「ピイ——」

「友だち……、嬉しいな」

指の下から解放された薬師のジーはタダオのホイミで傷を癒してもらい、皆で話をしながら洞窟から出る為に歩いている。

歩いて行く先には光が射して来てよつよく洞窟から抜け出した。

「さて、早速ダンカンさんの薬を作らなくてはな。タダオくん、ありがとうな

「どういたしまして。はやく作ってやつてな
「ああ、任せておきなさい」「

ビーは笑いながら親指を立て、仕事場へと走つて行った。

「さて、ワイらも帰る。スラリンのことも父ちゃんどバークに紹介
しなきゃいかんしな」「
「本当にいいのかな?」「

「ええにきまつとるやひ。ワイらはもう、ともだちなんやで

「ピイーー

「うん、ありがとうタダオ

そして、タダオ達も家へと帰つて行く。

翌日。

ビーが慌てず急いで正確に頑張った為、薬は明け方には完成し、マニヤとレイコはさつそく薬を持ってアルカパへと帰る事になった。

「女一人だけでは何かと危険だからな、私が護衛して行くとしよう。
タダオよ、お前も来るか?」

「うん、 もちろんワゴンも行くで」

「ピイツ」

「僕はまだ外の人間が怖いから留守番してるよ」

ピエールはもちろん自分もついて行くと張り切り、スラリンはまだ外が怖いと留守番しようとする。
そんな二人にパパスは。

「ピエールには悪いがお前も留守番だ」

「ピイーー？」

「なんでや、父ちゃん？」

「アルカパはこの村より幾分大きな町だからな。 そんな所にピエールを連れて行くと騒ぎになりかねん」

「ピエールは悪い魔物やないで！」

「それはよく分かっている。 だが、人は魔物というだけで怖がるのだ。 それにダンカンの家は宿屋だからな、悪い噂が立つと客が泊らなくなるやもしれん」

「ごめんね、タダオくん」

「ううん、いいんや。 というわけでピエールもるすばんや」

「ピイーー」

「坊っちゃん、パパス様、お気をつけて行つて来て下せー」

「ピイーー」

「氣をつけてね、タダオ」

パークにピホール、スラリンの見送りを受けてパパスとタダオ、そしてマミヤにレイコはアルカパへと歩いて行く。

「ところでタダオ？」
「なんや、レイコ姉ちゃん」
「その頭のタンゴブヂうしたの？」
「……お尻ペンペンとゲンコツ、ビッちがいいかつて父ちゃんに言われたからな。……、さすがにもうこの年でお尻ペンペンはかんべんや」

＝冒険の書に記録します＝

《次回予告》

何とか薬師のおっちゃんを見つけて薬が出来上がったで。
父ちゃんにゲンコツもるたけどな……。
アルカパに帰るレイコ姉ちゃん達にワイもお伴でついて行つたんや。
でも、そこで……アイツら何ちゅーことをするんや！

オバケ退治？やつたら一やないかい！！

次回「Level3「オバケ退治にレヌール城へ」

トイの呪いは…父ちゃんのゲンコツや…

Levele 2 「廻廊の中には」その5（後書き）

（・・・・）タダオのセリフでひらがな表記が多いのはまだ6才だからそれっぽさを出そうとしてるからです。

（ へ へ ）さて、次回はいよいよアルカパへと舞台を移します。そして当然、あのイベントには彼女が登場します！お楽しみに。

少し思う所があって、タイトル変更。

……やっぱり、「オバケクエスト」は無いだろ？。

注・レイコがレヌール城のオバケの事を説明している所に修正を加えました。

Level 3 「オバケ退治にレヌール城へ」 その1

「アルカパ」

サンタローズから半日ほど歩いた所にアルカパの町はあった。元々、アルカパとサンタローズは「レヌール」という小国に属していたがレヌール王家は後継者を得る事が出来ずに断絶、王家は滅びレヌール城も今は廃城となり訪れる者は無いと言つ。

それにより、現在アルカパとサンタローズは大国「ラインハット」に併合されている。

Level 3 「オバケ退治にレヌール城へ」

「ただいまー、やつと帰つて來たわ」

レイコは元気に叫びながらアルカパの町の門を駆け抜け、門番をしている男はそんなレイコに笑顔で話しかける。

「お帰り、レイコちゃん。薬は手に入つたかい？」
「ええ、これでパパもすぐに元気になるわ」
「それは良かった。さあ、早く薬を持って行つておあげ」

「うん、じゃーねー」

レイコは家でもあるこの町一番の宿屋へと駆けて行き、マミヤとバスにタダオも漸くアルカパに辿り着いた。

「全く、レイコつたら。少し急ぎ過ぎよ」

「はははは、いいじゃないか。それだけダンカンの事が心配だったんだろ?」「うう」

「お帰り、マミヤさん。それにアンタは…バスさんじゃないか。久しぶりだな」

「ああ、久しぶりだな。シーよ」

「父ちやーーん、早^はうじてや」

何時の間にか先に進んでいたタダオが飛び跳ねながらバスを急かしている。

そんなタダオにバスは微笑ましそうに笑いながら答えてやる。

「分かった分かった、そう急かすな。ではな、シー」

門番をしているシーに挨拶を済ませるとバスとタダオはマミヤに連れられて宿屋へと入つて行き、ダンカンが寝ている寝室に案内される。

「ダンカン、久しいな。具合はどうだ？」

「おお、パパスじゃないか。何時帰つて来たんだ?『ゴホゴホッ』

「起きずともよい。マミヤ、早くダンカンに薬を」

「ありがとうパパスさん。さあアンタ、薬だよ」

ダンカンは薬を飲ませてもひりひり樂になつたのか、顔色も若干良くなつて來た。

「もう大丈夫だらう。タダオ、私達は少し話があるからお前は町でも歩いて来なさい。レイコちゃん、タダオの案内をたのめるかい?」

「ええ、任せておじ様。行こひ、タダオ」

「うん。たのむでレイコ姉ちゃん」

そうして一人は町へと出かけて行く。

バスと一緒にいろんな所を渡り歩いて來たタダオだが、立ち寄るのは小さな村や町ばかりであつた為、アルカバはタダオには初めての大きな町であった。

レイコと一緒に色々な店などを覗いたりしていると何処からか小さな悲鳴みたいな声が聞こえて來たので、その声の方に向かつてみると、池の中にある小島で、一人の子供が小さな動物を苛めていた。

「ほりほり、もつとちゃんと鳴いてみろよ」

『キュー』……、『くーん』

「違うだろ、猫ならニャーンて鳴かなきやダメだろ」

『ギャンツー』、『くーん』……』

小さな動物は怪我をしているのか抵抗も出来ずに蹲り、力無く呻き声を上げているが、それでも子供達は構わずに面白がって苛め続けている。

「アイシング……、なんちゅ一事をしつねんぢゃ……。」

「あいつ達は近所でも有名な悪がキよ」

「弱しもんのししめにやめんかし」
「！」

「何だよお前は。コイツは俺達が見つけたんだ、どうしようど俺達の勝手だろ」

がへん

タダオはすぐさま駆け出して苛めを止めをやめようとするが子供達は耳を貸さず苛めを続けようとしていた。

たが、外の街から歩いて来る、この姿を見ると、たんにオロオロとしだした。

「鳴き声が何だつて？」

「ええ――つ――」
「――」
「――」

「乙女は向かって何言つておる？」とばつぶつとささやく。

レイコの拳から繰り出される“星屑で革命”な拳を受け、いじめつ

子兄は吹き飛んだ後、頭から地面に叩き付けられた。

「さあ、その猫さん放してやるんや」

「嫌だね」

「どうしても嫌なの？」

「ぐつ……、い……嫌だ……」

いじめつ子兄弟は猫？を放せというタダオとレイコにあくまでも嫌だと言つて譲らない。

正直、レイコが怖い事は怖いのだが男としての最後の意地が勝つている様だ。

彼等の足元には木に紐で繋がれた猫？が辛そうに蹲つてゐる。

猫？と表記してゐるのはその動物の尻尾が九本に分かれているからだ。この動物…否、この魔物の名は「キラーフォックス」それも、最も獰猛で知られる「キラーフォックス・ナイン」である。

本来なら大人達がそんな恐ろしい魔物を町に入れる事を許す筈もなかつたのだが本来「キラーフォックス」はこの地方と言うよりこの大陸には住んでいない魔物なので大人達もそれと氣づかずについたら

しき。

「じゃあ、じゅせつたら放してくれるんや」

「そりだな……、じゃあ噂のレスール城のオバケを倒したらこの猫はお前達にやるよ」

「レスール城のオバケ？ それって何や、レイコ姉ちゃん」

「此処から少し離れた所にある古いお城で、もうずつと昔から誰も居ない筈なのに夜になるとお城から灯りが漏れ出して氣味の悪い笑い声なんかが聞こえて来るよ」

「そ、そつか……とにかく、そのオバケを倒して来たら猫さんはワイらがもらうで」

「よし、約束だ。オバケ退治が出来たらこの猫はお前達の物だ」

「決まりね！ タダオ、さつそく今夜出かけるわよ」

「おうー！ と、その前……『ホイ!!』」

70

タダオは辛そうにしているキラーフォックスに近づくと回復呪文を唱えてその体に付けられた傷を癒して行く。

「キコウ？ ……『ヘン』」

「もうちょっとのしんぼうやで。すぐに助けに来てやるからな

「ハン…ハン、ハン」

キラーフォックスはタダオの言つ事が分かったのか、しきりに頷きながらその尻尾をパタパタと振っていた。

「タダオ、あんた魔法が使えたのね」

「まだホイミだけやけどな」

「とにかく、オバケ退治がすんだりその猫は私達の物になるんだからね。もし、また苛めて傷が増えてたらタダじや済まらないわよ」

「わ、分つたよ」

「じゃあタダオ行くわよ。ちゃんと準備しておかなきや」

「了解や」

Level 3 「オバケ退治にレヌール城へ」 その1（後書き）

（・・・）と、言ひ説でタマモ登場、それによりキラー・パンサーからキラーフォックスへと変えさせて頂きました。

Level 3 「オバケ退治にレヌール城へ」 その2

それからタダオとレイコは武器屋へと行き、戦力の強化を計った。タダオは新たにブーメランを、レイコには茨の鞭を買い、防具も革の鎧に革のドレスを購入。

それらはばれない様に宿屋の裏に置いてある樽の中に隠しておいた。準備は万端、後は夜になるのを待つだけなので体力を温存する為にゆっくり休んでおこうと宿屋の中に入るとパパスは帰る準備をしていた。

「戻ったか、タダオ。ダンカンの見舞いも済んだ事だしサンタロー
ズに帰るぞ」

「え……ちょ、ちょっと待つてや父ちゃん」

「ん? どうしたタダオ」

「今から帰るんか?」

「ああ、今からなら夜になる前に帰り着けるだらうからな」

「そ、そんな……猫さんが……」

「タダオ……」

今帰つたらレヌール城のオバケ退治は出来ず、猫を助けるという約束が果たせない。二人共、どうしようかと悩んでいるとそこに助けの声が聞こえて来た。

「ちょっとパパさん。 そんなに急いで帰る事もないだろう、 一日位泊つて行きなよ」
「そ、 そうよおじ様！ 私ももう少しタダオと遊びたいわ」
「ワイもレイ「姉ちゃんともう少し一緒にいたいで！」
「そ、 そつか。 ならば少し甘えさせてもらうとするか」「わーーい。（何とかたすかつたな、 レイコねえちゃん）」
「今日は一緒に寝ましうね、 タダオ。（危ない所だつたわ。 ママには感謝ね）」

両手を繋ぎ、 飛び跳ねながら喜ぶ一人をパパスとマミヤは微笑ましそうに見つめている。

まあ、 傍から見ると仲の良い二人が一緒に居られる事を喜び合っている様にしか見えないのだから。

だからこそ……

「これで家の宿屋も将来は安泰だね。 タダオ君なら良い婿になれるよ、 ねえパパさん」
「マミヤはそんな風にタダオの事を狙っていたのか……」
「あら、 当たり前じゃないか。 ほほほほほほほ

幸か不幸か、 そんな大人達の会話は子供達の耳には届かなかつた。

そして、 大人達も眠りについた深夜、 レイコは隣に寝て いるタダオを起こし家から抜け出して行く。

念の為、パパスが寝ている所も覗いて見たがぐつすりとよく寝ていた。

それでも「マーサよ、私達のタダオは真直ぐに成長しているぞ」と、寝言を言つた時には黙つて行く事に罪悪感もあつたが猫を助ける為だと自分達に言い聞かし、隠してあつた武器と防具を身に付けてレヌール城へと歩き出した。

「見えて来たわ、あれがレヌール城よ」

「うつわ～。うすきみ悪い城やなあ」

タダオとレイコの視線の先に佇むのは、嘗ては壯觀な白亜の宮殿で在つたであるレヌール城。

しかし現在はその外見に当時の面影を残すのみで、暗雲に包まれ時折雷鳴が轟く怪しげな城と化していた。

「さあ、今更逃げるだなんて言う選択肢は無いからね。覚悟を決めなさい」

「元、逃げるつもりなんてないけど、でも悪い事には変わつてないく
んで」

「グダグダ言わない。いやついやつと進みなさい」「へへへい

そして一人は城の正門から入ろうとするが、巨大な上要所が錆びついているらしくその扉は開かない。

何処か他に入る場所が無いかと探し回る内に、城の裏側に上へと登れる鉄梯子を見つけた。

「とりあえず、入れそうな場所は此処しか無い様ね」
「やな。じゃあ、レディーファーストでレイ…バゴムッ………ワイ
が先に登らせていただきます。いてて…」

レイコに拳骨を受けた頭を擦りながらタダオは梯子を登つて行き、レイコもその後に続く。

登り終えた先にはアーチ状の門らしき場所、その先には城の中へと招き入れる様に扉が開いていた。

「あそこから入れるわね、行くわよタダオ」「なんか、嫌なよかんがするんやけどな」

周りを警戒しながら進み、扉から城の中に入ろうとした瞬間、突如門らしき場所のアーチ状の部分から鉄格子が降りて来て二人は閉じ込められてしまった。

「…嫌なよかんはしどつたんや」

「い、今更言つても仕方ないでしょ。」うなつたら先に進むしかないわ」

「せやな。城の中からならほかに出口があるかもしれん。オバケを倒してからさがそつな」

「その意氣よ」

半開きの扉を開いて中に入るときには幾つかの棺桶が並び、おどろおどろしい雰囲気の中、二人は身を寄せ合いながら進んで行く。

そして目の前に下の階に降りる階段が見えて来た時、タダオはすぐ隣に居た筈のレイコの気配が消えている事に気が付いた。

「あ、あれ？ し、レイコ姉ちゃん？ どこや？ い、いたずらは無しやで……。ひょっとしてオバケにさらわれたんか？！」

レイコが傍に居ない＝オバケに攫われた。

この図式が頭を過ぎつた時、タダオはさつきまでの怯えは消え去り、レイコを探し出す為に全力で駆け出し、階段を駆け下りて行く。

下の階に降りると石像が並ぶ先に明かりが漏れて来る扉を見つけ、再び駆け出す。

すると石像の中の一體が突如動き出し、タダオの行く手を遮る様に通路を塞いだ。

「じゅまやーーーっ！… どかんかーーーいつーー！」

タダオの攻撃

会心の一撃

動く石像をやつつけた。

レイコを心配するが故での火事場の馬鹿力か、強敵である筈の動く石像を一撃で倒した上、それに気付かずにいるタダオだった。

扉を開くと、其処は城の屋上の一角で庭園みたいな場所に墓が二つあつた。

タダオはその墓に近づいてみると墓石には「タダオのはか」と書かれており、もう一つの墓石を見ると「レイコのはか」と書かれていた。

「「レイコのはか」って……、たいへんやーーーっ… レ、レイコ
姉ちゃんーんーー！」

タダオは大慌てで墓石を力一杯に押すと墓石はゆっくりとずれて行き、中からレイコが出て来た。

「レイコ姉ちゃん、ぶじやつたんやな。良かった——！」

安心したタダオは泣きながらレイコに抱き付いたが、レイコは何も言わずにその手をそつと離せるとゆつくりと立ち上がる。

「へ、レイ」「姉ちやん？」

その体から湧きあがる怪しげな雰囲気に少し怯えながらもタダオはレイコの名を呼んでみた。

レイコの笑い声はその黒いオーラと共に激しさを増し、そして.....

「私を墓の中に押し込むなんていい度胸してゐるじゃない、あんの腐
れ悪靈共！……」の美神令子が極楽に逝かしてやるわッ！
！」

遂にレイコの怒りは限界を超えた。

「美神つて誰や――――つ！？」

ついでにタダオの恐怖も頂点に達した。

＝冒険の書に記録します＝

『次回予告』

猫さんを助ける為にオバケ退治にやつて来たレヌール城。
でも此処には猫さんよりもっと困つてゐる人達が居たんや。
待つてな王様たち、ワイらが絶対に助けたるからな。
そうや、猫さんも王様たちも、ワイとレイコ姉ちゃんが助けるんや。

……でもな、もう一度聞くでレイコ姉ちゃん。

次回 Level 4 「GSレイコ 極楽大作戦！」

美神つて誰や――つ！？

Level3「オバケ退治にレヌール城へ」その2（後書き）

（・・・）ありのまま、全てを告白します。美神をビアン力役にしたのはこのネタをやりたかったからです。でもまあ、それ程ハズレ役つて訳でも無いと思うんですよ、美神もあれで結構面倒見はいい方ですし。とにかく此処の美神^{レイコ}は素直になつた美神つて事で。……次のタイトルもあくまでもネタで主役はタダオです……の筈。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2139y/>

ドラゴンクエスト?～紡がれし三つの刻（とき）～

2011年11月17日20時20分発行